

1. 文学部

I	文学部の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	1 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	1 - 3
	分析項目 I 教育活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	1 - 3
	分析項目 II 教育成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	1 - 1 3
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	1 - 2 1

I 文学部の教育目的と特徴

文学部では、以下のような教育目標を掲げ、学生に通知している。

科学技術の急速な発展やグローバル化の進展の中で「人間とは何か」という問いが、以前にも増して重要になっています。文学部は、この根源的な問いに、人文学の様々な分野から総合的にアプローチすることを特色としています。人間が長い歴史を通じて築き上げてきた豊かな知的遺産に学び、それを現代に生かすという課題に取り組みます。また、従来の学問の枠組みにとらわれず、人文学内外の多様な領域との協力・連携を積極的に推し進め、新しい人間像の構築に努めます。

文学部の教育においては、古典や外国語文献の読解、資料の調査と分析、フィールドワークなどを通じて、専門的知識を修得するとともに、柔軟で幅広いものの見方を身につけることを重視します。そのような教育を通じて、次のような人材の育成を目指します。

- ・過去から現代にいたる人間の営みに強い関心を持ち、日本や世界の社会・文化についての幅広い教養と国際的な視野を持った人
- ・人間知にかかわる知見と素養を備え、人文学における高度な研究に携わる基礎的能力や意欲を持った人
- ・課題を探究する意欲と能力を持ち、論理的な思考とそれを的確に表現する力量を備え、様々な分野で活躍できる人

(出典：文学部学生便覧)

この目標の達成のために、文学部では、次のような特徴を備えた教育を実施している。

- ①教育組織の編成において、哲・史・文という伝統的な人文学を骨格にもちつつ、現代的諸問題に対応するために行動科学や言語科学といった新しい分野を抱合し、総合的な人文学をめざしている。
- ②教員と学生の個性の交流を重視した少人数教育を実施している。
- ③学びの集大成としての卒業論文を重視している。
- ④社会人基礎力の要請にもつながる資料の収集・分析力を徹底的に鍛えている。
- ⑤外国語運用能力（特に初修外国語）や留学体験を重視している。

[想定する関係者とその期待]

広く社会から、幅広い教養と知性を備えた人材の育成が求められており、また、様々な企業をはじめ、教育・官公庁を含めた諸機関から、課題探求能力と専門的素養をもった人材の養成が求められている。具体的には、総合的な判断力をささえる教養、議論を通じて合意を形成していくコミュニケーション能力、外国語運用能力、海外留学を通じて得られる実践知や国際感覚、物事を批判的に検討する姿勢、資料の扱い方に関する専門的な技能などを備えた人材であり、文学部の教育はそれに対応している。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

●教育の実施のための基本的組織の編成

教育の特徴①に述べたように、文学部では、教育組織の編成において、哲・史・文という伝統的な人文学を骨格にもちつつ、現代的諸問題に対応するために行動科学や言語科学といった新しい分野を抱合し、総合的な人文学をめざしている。そのために必要な教員組織として、次のような人数の専任教員を配置している(資料Ⅱ-I-1-1)。第1期に比べて約2割減員されているが、1領域最低2人の原則は維持している。

資料Ⅱ-I-1-1：文学部の教育を担当する教員の数 平成27年5月1日現在

学科	専修コース	専任教員数					
		教授	准教授	講師	助教	計	助手
人文学科	哲学芸術学専修コース	3	6			9	
	行動科学専修コース	5	5			10	
	歴史文化学専修コース	6	5			11	
	言語科学専修コース	3	6			9	
	言語文化学専修コース	8	4			12	
	学芸員課程担当		1			1	
	国際協力教員	1	3			4	
計		26	30			56	

(出典：社会文化科学研究科総務グループ資料)

●多様な教員の確保

文学部では、専修コースの専門教育を中心に担当する教員(留学生担当教員1人を含む)のほか、1人の学芸員課程担当教員、外国語教育を担う4人の国際協力教員が定期的に専門教育を担当している。このほか、専門教育を補完する教員として、1人の特命教授と1人の特任教授、言語教育センターの教員6人、教育学部の教員4人、グローバルパートナーズの教員1人、教育開発センターの教員1人、東アジア国際協力・教育研究センターの教員1人が学内非常勤教員として、また20人が学外非常勤として、文学部の専門教育を担当している(平成27年度)。

●教育内容、教育方法の改善に取り組む体制

文学部では、教育に関する諸事項の審議を行う機関として代議員会を設置している。また、教育課程の運営に関わる業務を行う委員会として教育委員会を、教育方法の改善に取り組む委員会としてFD委員会を設置している。このほか、副専攻コースの運営や外国語教育の内容・方法の検討のための外国語教育検討WG、教育改革の方向性を検討するための新カリキュラム構想WG(将来構想検討WG)も設置している。

文学部では、平成20年度にガイダンス科目「人文学の基礎」の抜本的な改善を行ったが、その後も定期的に、独自アンケートを行ったり、授業の内容・方法の検討を行う研修会を開催したりしている。専門教育への導入を行う「人文学への招待」でも独自アンケートを行い、教育効果を検証している。このほか、教員と学生(新入生・在学生)との懇談会を開催し、文学部の教育に関して率直な意見交換を行っている。

●教員の教育力向上のための体制

毎年度末にFD教員研修を開催し、「人文学の基礎」の当年度と次年度の担当者がこの授業の内容と方法について実践報告を踏まえて検討している。また、公開授業を、平成22年

度は2回、平成23年度は6回、平成24年度は2回、平成25年度は2回、平成26年度は2回、平成27年度は2回実施し、事後、意見交換を行っている。平成25年度からは、ICTに関するセミナーを開催し、教育方法の改善や情報交換に主体的に取り組んでいる。

●入学者選抜方法の工夫とその効果

文学部では、一般入試（前期日程・後期日程）、私費外国人留学生特別選抜、推薦入試 I といった多様な入試を実施している。入試区分ごとの志願倍率は資料Ⅱ-I-1-2の通りである。前期日程の志願倍率は、ほぼ2倍から3倍である。後期日程では、ほぼ7倍台であったが、新課程に合わせて配点比率を見直した平成27年度は9倍を超えた。推薦入試も平均で3.5倍を超えている。

入学時の TOEIC-IP の平均点は平成25年度を除いて500点を超えている（資料Ⅱ-I-1-3）。私費外国人留学生を除き（入学者が若干名なので、比較できない）、入試区分による入学後の成績にほとんど差がないことが注目される（資料Ⅱ-I-1-3）。

資料Ⅱ-I-1-2：入試区分ごとの志願倍率

	前期日程	後期日程	推薦 I
平成22年度	2.35	7.87	4.25
平成23年度	2.02	7.77	3.70
平成24年度	2.18	6.93	3.55
平成25年度	3.01	7.77	3.50
平成26年度	2.10	7.67	3.55
平成27年度	2.37	9.67	2.95

（出典：文学部教務学生グループ資料）

資料Ⅱ-I-1-3：入学時の TOEIC-IP 得点および入試区分ごとの入学後の成績（平均点）

平成28年5月1日現在（ただし、平成22、23年度入学生は平成27年5月調査による）

入学年	入学時 TOEIC-IP	前期日程	後期日程	推薦 I	私費外国人留学生
平成22年度	509	83.78	82.96	84.17	84.50
平成23年度	500	83.42	82.20	85.21	87.13
平成24年度	523	84.40	82.30	83.30	86.72
平成25年度	479	83.48	84.07	84.29	81.58
平成26年度	528	83.74	84.02	83.74	84.02
平成27年度	523	85.55	86.73	84.82	86.14

（出典：文学部教務学生グループ資料）

（水準）期待される水準を上回る

（判断理由）

文学部では、教育改革に柔軟に取り組めるよう1学科制をとるとともに、5つの専修コース、副専攻コース、学芸員課程といった多様な教育内容を支えるために多様な教員を確保し、社会と学生のニーズに応えている。

文学部では、教育に関する諸事項の審議を行う代議員会を設置するとともに、教育や学生支援に関わる複数の委員会やWGが設置され、様々な角度から教育の内容・方法の改善に取り組める体制が存在している。

文学部では、初年次教育に関して独自のアンケートを実施し、学生との懇談会を開催して学生の意見を聞く場を設け、また公開授業や教員研修を行うなどして、教育の改善に積極的に取り組み、大きな教育的成果を上げている。

入試区分によって入学後の成績に差がないということは、多様な選抜と学力の確保が両立できていることを示している。

観点 教育内容・方法

(観点に係る状況)

●体系的な教育課程の編成

文学部人文学科は、哲学芸術学、行動科学、歴史文化学、言語科学、言語文化学の 5 つの専修コースを設けている(資料Ⅱ-I-2-1)。学生は 2 年次より 1 つの専修コースに所属する。

資料Ⅱ-I-2-1：文学部の学生定員と在籍数(年次は在籍年次) 平成 27 年 5 月 1 日現在

学科	専修コース	入学 定員	在籍数				在籍者計
			1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	
人文学科		175	188				188
	哲学芸術学専修コース		1	19	32	27	79
	行動科学専修コース			43	43	50	136
	歴史文化学専修コース			45	54	59	158
	言語科学専修コース			36	28	44	108
	言語文化専修コース			43	32	46	121
	計		189	186	189	226	790

(出典：文学部教務学生グループ資料)

1 年次は、ガイダンス科目、主題科目、個別科目、外国語科目からなる教養教育科目を中心に履修する(課外学習時間確保のため年間 32 単位が履修上限)。ガイダンス科目「人文学の基礎」では、導入教育として、文献の探し方、読み方、レポートの書き方、発表の仕方などを教える。1 年次には、「人文学への招待」「人文学入門演習」などの専門教育科目も履修し、専門教育の一端に触れながら、コース選択の参考にする。2 年次以降は、所属コースの概説科目、講義科目、演習科目を中心に履修する。3 年次後期から 4 年次後期までの 3 セメスターは、卒業論文に関わる指導を課題演習で行う。卒業に必要な 124 単位のうち 46 単位は、文学部あるいは他学部の専門教育科目から自由に履修することを認めている。これによって、副専攻コースの履修、教職免許、学芸員資格などの取得が無理なく行える。協定大学での単位修得、外国語の外部検定試験、インターンシップ(就業体験実習)に関する単位認定制度もある。卒業論文は必修であり、提出後に口頭試問を受け、合格すれば 10 単位が与えられる。副専攻コースは、所定の科目を 24 単位修得すればコースの修了が認定される。

●社会のニーズに対応した教育課程の編成・実施上の工夫

教育の特徴④に述べたように、文学部では、社会人基礎力の養成にもつながる資料の収集・分析力を鍛えるための科目が演習系を中心に段階的に配置され、集大成としての卒業論文がある。ミーティングやプロジェクトへの参加、報告書・プレゼン資料の作成等を求められることの多い社会人にとって、演習における議論・討論の体験や卒業論文の作成体験は大変貴重である。

文学部では、「博物館法施行規則の一部を改正する省令」に対応するために、平成 24 年度に学芸員担当教員を新たに採用し、新制度に対応した学芸員課程を開設した。

●国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫

教育の特徴⑤に述べたように、文学部では、外国語の運用能力を高めたい学生のために、英語(現在は中止)、ドイツ語、フランス語、中国語の副専攻コースを開設している(資料Ⅱ-I-2-2)。7 割以上の学生がいずれかの副専攻の授業を履修していることになる。教員定員の削減により、英語副専攻は中止せざるをえなくなったが、外国語教育センターで開講している全学副専攻に英語副専攻があるので、意欲のある学生にはそちらを履修するよう指導している。

平成 24～26 年度には、大学機能強化戦略経費によって、フランス語副専攻コースを基盤

岡山大学文学部 分析項目 I

に、「ヨーロッパ言語共通参照枠」に準拠した語学教育プログラムの構築を目指した教育改革を行った。

資料Ⅱ－Ⅰ－２－２：文学部副専攻コース履修者数（文学部生・単位修得者）平成 28 年 3 月末現在

	英語	ドイツ語	フランス語	中国語	計
H23 年度入学生	55	45	22	43	165
H24 年度入学生	55	35	33	53	176
H25 年度入学生		34	27	25	86
H26 年度入学生		24	59	34	117
H27 年度入学生		39	36	62	137
合計	110	177	177	217	681

(出典：文学部教務学生グループ資料)

資料Ⅱ－Ⅰ－２－３は海外留学の状況、資料Ⅱ－Ⅰ－２－４は語学研修への参加の状況である。留学に関しては、第 1 期が年平均 8 人程度であったことと比較すれば、大幅に増加したといえる。部局間協定による留学が多いことが特徴であり、副専攻コースとの相乗効果も大きい。短期の語学研修を含めれば、平均して年間約 40 人以上（20%超）の学生が海外に渡っていることになり、海外で学ぶ習慣が文学部学生に確実に根づいてきている。

特にドイツ・フランスへの派遣にあたっては、人材育成を目的としたプログラムを立案し、日本学生支援機構より支援を受けている。奨学金を受給した学生の内訳は、ボルドーモンテーニュ大学が 12 人、ボーフム大学が 2 人である。

岡山大学文学部 分析項目 I

資料Ⅱ-I-2-3：留学者の派遣の状況

留学区分	国名	大学名	派遣年度					
			H22	H23	H24	H25	H26	H27
部局間 交流協定	韓国	国民大学		2				
	トルコ	チャナッカレ大学						
	ドイツ	ベルリン自由大学				1		
		ルール大学ボーフム			1	3	2	2
	フランス	ボルドー第3大学	4	4	6	5	5	
	部局間集計		4	6	7	9	7	2
大学間 交流協定	韓国	成均館大学校	2					
	中国	吉林大学	3					
	フランス	ストラスブール大学				1		
		ボルドーモンテーニュ大学						4
	カナダ	アルバータ大学					1	
	大学間集計		5	0	0	1	1	4
キャンパス アジア	韓国	成均館大学校		3				
	中国	吉林大学			1		3	
	キャンパスアジア集計		0	3	1	0	3	0
EPOK	中国		1		2			
	タイ					1	1	
	アメリカ		5	4	10	3	4	6
	オーストラリア					2	1	
	英国		3	1		2	2	
	カナダ							1
	EPOK集計		9	5	12	3	9	11
交流協定に よらない	中国	西北大学	1					
		吉林大学		1				
		西南財経大学			1			
	オーストラリア	ボンド大学附属語学学校			1			
		シドニー大学						1
	スーダン	アフリカ国際大学				1	1	
	ドイツ	レーゲンスブルク大学					1	1
		ルール大学ボーフム					1	
	イタリア	大学未確認						1
	アメリカ	南オレゴン大学						1
留学者数総計			19	15	22	14	23	21

(出典：文学部教務学生グループ資料)

資料Ⅱ－Ⅰ－２－４：語学研修の参加の状況

	国名	大学名	参加年度					
			H22	H23	H24	H25	H26	H27
語学研修 サマース クール	韓国	成均館大学校	4	5	3	2		
	中国	吉林大学		6	6			
		首都師範大学				4		
	タイ	チュラロンコン大学				3	1	3
		カセサート大学				3	1	1
	アメリカ	南オレゴン大学						1
		ポートランド州立大学		2	3			
		グアム大学	4	2	8			3
	オーストラリア	アデレード大学	13	7	9	3	7	6
	カナダ	ヴィクトリア大学				4	7	3
	英国	エクセター大学		1				
		ヨーク大学				1	3	2
	ドイツ	ルール大学ボーフム					8	
	アイルランド	ダブリンシティ大学						6
	フランス	グルノーブル大学						1
語学研修集計			21	23	29	20	27	26

(出典：文学部教務学生グループ資料)

平成 25 年度に開設されたグローバル人材育成特別コースの履修者は、平成 25 年度入学生が 6 人、平成 26 年度入学生が 7 人、平成 27 年度入学生が 8 人と、少しずつ増加している。

交流協定に基づく留学は在学のまま可能であり、留学先で修得した単位を認定する制度も整備されている。指導教員と教務学生係は、帰国後の履修計画を踏まえた指導を留学前に行う。

留学生の受入に関しては、正規生、日本語日本文化研修留学生、EPOK による特別聴講学生、部局間または大学間協定による特別聴講学生、キャンパスアジアによる特別聴講学生の枠があり、受入の状況は、資料Ⅱ－Ⅰ－２－５、資料Ⅱ－Ⅰ－２－６のようである。平成 24 年度以降、受入数は大幅に増加しており、受入総数の年平均は 40 人以上に上る。部局間および大学間の交流協定の増加、キャンパスアジア事業の採択の効果が出ている。

特にドイツ・フランスからの受入にあたっては、人材育成を目的としたプログラムを立案し、日本学生支援機構より支援を受けている。奨学金を受給した学生の内訳は、ボルドーモンテーニュ大学が 15 人、ボーフム大学が 3 人、ベルリン自由大学が 1 名である。

資料Ⅱ－Ⅰ－２－５：私費外国人留学生（正規生）の受入の状況

H22	H23	H24	H25	H26	H27
4	1	3	4	2	2

(出典：文学部教務学生グループ資料)

資料Ⅱ-I-2-6：留学生（特別聴講学生）の受入の状況

受入区分	国名	大学名	受入年度					
			H22	H23	H24	H25	H26	H27
部局間 交流協定	韓国	国民大学校		1	1		2	1
	ドイツ	ベルリン自由大学	/	/	/	1	2	2
		ルール大学ボーフム	/	1	1	2	3	2
	フランス	ボルドー第3大学	4	4	6	5	5	/
	部局間協定集計			4	6	8	8	12
大学間 交流協定	韓国	成均館大学校	3		/	/	/	/
		高麗大学校	/	1				
	中国	長春理工大学	/	/		1	1	3
		東北師範大学						3
	フランス	ストラスブール大学	/	2				
		ボルドーモンテーニュ大学	/	/	/	/	/	5
	セルビア	ベオグラード大学	/	/	1	1		
大学間協定集計			3	3	1	2	1	11
キャンパス アジア	韓国	成均館大学校	/	/	1	4	3	4
	中国	吉林大学	/	/		2	2	2
	キャンパスアジア集計					1	6	5
EPOK	韓国				3	2		
	中国		1		1		1	
	台湾							1
	アメリカ		7	8	10	8	4	11
	オーストラリア			1	1	2	1	4
	カナダ							1
	タイ				1	3	3	1
	ドイツ					1		
	英国				3	2	5	5
	EPOK集計			8	9	19	18	14
国費（日本語 日本文化研 修留学生）	中国							
	インド		1		1		2	1
	インドネシア				2			1
	セルビア		1		1		2	
	トルコ			1		1		1
	フィリピン					1		
	ブラジル				1	1		
	ロシア					2		
	ミャンマー						1	
	ハンガリー共和国							1
	スウェーデン							1
	国費（日研生）集計			2	1	5	5	5
特別聴講学生受入数総計			17	19	34	39	37	50

(出典：文学部教務学生グループ資料)

●養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

文学部では、人間知を追求するための専門性や課題探究の意欲と能力を備えた人材の養成を目標として掲げており、これを達成するために、教育の特徴②③に述べたように、卒業論文を頂点とする、演習積み上げ型の少人数教育を徹底して行っている。導入科目であ

る「人文学の基礎」はクラスあたり 12～13 人、専門基礎的な科目である「人文学入門演習」はクラスあたり平均 19 人（上限 30 人）の受講者で運営している。一般の「演習」についても、ほとんどの授業が受講者 20 人以下で運営されている。卒業論文の指導は 1 教員あたり平均 4 人程度であり、このことによって、非常に高度な内容をもつ卒業論文が毎年多数提出されている。平成 28 年度より優秀論文賞の表彰を行う予定である。

●主体的な学習を促す工夫、学習支援

1 年次生の専修コース配属を決定するにあたっては、受入目安数を超えても、その 1.3 倍までは受け入れることになっている。平成 22 年度以降は、第二志望のコースに配属される学生は 1 割以下に止まり、第三志望に配属される学生は出ていない(資料Ⅱ-I-2-7)。第二志望の専修コースに配属された学生に対しては、意欲を失わないようケアを行っている。なお、平成 28 年度にはコース制を廃止し、学修の自由度を高める。

資料Ⅱ-I-2-7：第一志望の専修コースに配属された学生の割合

	第一志望の専修コースに配属された学生の数	第二志望の専修コースに配属された学生の数	第三志望の専修コースに配属された学生の数
平成 22 年度	177 人	10 人	0 人
平成 23 年度	170 人	12 人	0 人
平成 24 年度	169 人	15 人	0 人
平成 25 年度	174 人	12 人	0 人
平成 26 年度	176 人	12 人	0 人
平成 27 年度	179 人	9 人	0 人

(出典：文学部教務学生グループ資料)

文学部では、すべての学生に指導教員を割り当て、学修面・生活面のサポートに努めている。その一環として、指導教員は、卒業資格単位の修得状況に問題のある学生に対して指導を行い、その結果を学生生活委員会に報告している。

文学部では、TA 制度を活用して、授業時の学習支援を行っている。TA の採用実績は、資料Ⅱ-I-2-8 のようである。半数以上の教員が TA 制度を活用していることが分かる。平成 27 年度は、通常採用のほか、カリキュラム開発の目的でも採用した。

資料Ⅱ-I-2-8：TA 採用実績

	人数	のべ時間	別経費（外数）
平成 22 年度	35 人	1349 時間	
平成 23 年度	31 人	1386 時間	
平成 24 年度	32 人	1254 時間	
平成 25 年度	28 人	1229 時間	
平成 26 年度	34 人	1541.5 時間	
平成 27 年度	29 人	1515 時間	カリキュラム開発経費：4 人 183 時間 文学部共通経費：1 人 58 時間

(出典：社会文化科学研究科総務グループ資料)

文学部では、インターンシップを「就業体験実習」として専門教育科目の中に開設し、単位認定を行っている。実習期間は夏季休業中の 2 週間とし、指導教員が事後の指導と評価を行う。参加の状況は、資料Ⅱ-I-2-9 のようである。

資料Ⅱ－Ⅰ－2－9：就業体験実習への参加状況

平成 22 年度 合計 7人	株式会社グロップ 2人 ピュアリティまきび 1人 株式会社ハローズ 1人 株式会社岡山国際ホテル 1人 山陽映画株式会社 1人 岡山市文化振興課 1人
平成 23 年度 合計 5人	中国電力 1人 竹久夢二本舗 敷島堂株式会社 1人 岡山トヨベット株式会社 1人 山陽映画株式会社 1人 岡山県生涯学習センター 1人
平成 24 年度 合計 13人	株式会社グロップ 1人 株式会社シモデンツーリスト 1人 株式会社山陽新聞社 1人 株式会社倉敷ケーブルテレビ 1人 山陽映画株式会社 1人 島山製菓株式会社 1人 サンコー印刷株式会社 1人 カイトックグループ 1人 おかやま信用金庫 1人 全労済 岡山県本部 1人 岡山県生涯学習センター 1人 岡山地方法務局 2人
平成 25 年度 合計 10人	株式会社シンセリティー販売×企画 1人 株式会社山陽新聞社 1人 株式会社中国銀行 1人 株式会社ほっとこうち 1人 小坂田建設 1人 セーラー広告株式会社岡山本社 2人 おかやま信用金庫 1人 岡山市市民局文化振興課 1人 岡山地方法務局 1人
平成 26 年度 合計 5人	おかやま信用金庫 1人 岡山地方労働局 1人 くるまのハヤシ 1人 株式会社山陽新聞社 1人 株式会社シモデンツーリスト 1人
平成 27 年度 合計 6人	おかやま信用金庫 1人 岡山市市民協働局女性が輝くまちづくり推進課 1人 山陽新聞社 2人 晴れ間(特定非営利活動法人) 1人 備前市まちづくり部まち創生課、保健福祉部介護福祉課 1人

(出典：文学部教務学生グループ資料)

新入生に対しては、4月1日と4月8日の2回にわたってオリエンテーションを開催し、文学部の教育と履修について詳細な説明を行っている。また、2年次生・3年次生に対しては、専修コースごとに学年別のガイダンスを4月8日に開催している。

1号館の耐震工事後、1階の全学共通スペースの1室を学生用の自習室（リフレッシュルーム）として開放して以来、毎日多くの学生がこの部屋を活用している。

（水準）期待される水準を上回る

（判断理由）

文学部の特長である教育研究分野の多様性・総合性・学際性・国際性を維持・発展させるために5つの専修コースと4つの副専攻コースを開設している。非常に手厚い導入教育と、演習を中心とした少人数教育、3セメスターにわたって指導する卒業論文は、文学部の教育の層の厚さになっている。副専攻コースの充実と部局間交流協定の締結の推進により、海外に出る学生は倍増した。留学生の受入も幅広い。専修コースへの配属の決定は可能な限り学生の意思を尊重して行われている。卒業資格単位の修得状況に問題のある学生には早期に対応しており、自習環境の整備にも努めている。以上のように、文学部では、体系的な教育課程を編成し、国際的通用性のある教育を実践し、主体的な学習の促進や学習支援に努めている。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点に係る状況)

●履修・卒業の状況から判断される学習成果の状況

文学部では、年2回、1 Semesterあたり15単位を標準修得単位数とし、それに満たない学生をピックアップして、指導教員が面談を行っている。資料Ⅱ-Ⅱ-1-1は、標準修得単位未修得学生の数の推移である。入学から調査時点までの間に休学歴・留学歴のある学生の数をかっこに示し(内数)、それを除いた数を実質的な要指導学生と判断している。また、文学部の学生の卒業の状況は、資料Ⅱ-Ⅱ-1-2のようである。

資料Ⅱ-Ⅱ-1-1：標準修得単位未修得学生の数の推移

入学年	H22		H23		H24		H25		H26		H27	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
H15年度	1 (1)											
H16年度	1 (1)											
H17年度	5 (5)	3 (3)	3 (3)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	1 (1)		
H18年度	14 (5)	7 (2)	7 (3)	6 (2)	4 (2)	3 (2)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	1 (1)		
H19年度	16 (5)	15 (5)	14 (8)	8 (4)	8 (4)	2 (1)	2 (1)	2 (1)	0 (0)	0 (0)		
H20年度	10 (3)	12 (3)	17 (5)	20 (12)	16 (11)	9 (6)	8 (7)	4 (4)	3 (3)	2 (2)	2 (2)	1 (1)
H21年度	2 (0)	3 (0)	2 (0)	3 (0)	5 (0)	11 (6)	6 (3)	3 (1)	2 (1)	1 (0)	1 (0)	1 (0)
H22年度	2 (0)	7 (0)	10 (1)	10 (1)	11 (2)	12 (5)	19 (5)	18 (7)	15 (8)	8 (4)	6 (4)	5 (3)
H23年度			13 (0)	16 (0)	21 (1)	22 (3)	18 (2)	18 (3)	24 (4)	29 (14)	25 (16)	10 (4)
H24年度					8 (0)	11 (0)	12 (0)	15 (1)	14 (2)	16 (3)	23 (5)	29 (11)
H25年度							10 (0)	12 (1)	13 (1)	14 (4)	12 (4)	12 (3)
H26年度									5 (1)	6 (1)	9 (3)	12 (2)
H27年度											3 (0)	5 (1)
合計	51 (20)	47 (13)	66 (20)	65 (21)	75 (23)	72 (25)	79 (22)	76 (22)	78 (22)	78 (30)	81 (34)	75 (25)
実質的な 要指導学生	31	34	46	44	42	47	57	54	56	48	47	50

(出典：文学部教務学生グループ資料)

岡山大学文学部 分析項目Ⅱ

資料Ⅱ－Ⅱ－1－2：卒業状況（卒業生数（うち2年以内留年/うち2年超留年））

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
哲学芸術学	25 (1/0)	24 (4/0)	23 (5/0)	22 (1/0)	23 (0/1)	19 (3/0)
行動科学	41 (2/0)	40 (1/0)	44 (3/0)	37 (0/0)	37 (4/1)	43 (7/0)
歴史文化学	38 (5/1)	36 (1/1)	35 (4/1)	27 (7/0)	36 (2/0)	38 (4/0)
言語科学	37 (8/0)	39 (6/0)	41 (5/0)	45 (6/0)	33 (6/0)	37 (5/0)
言語文化学	47 (8/1)	31 (5/0)	49 (9/0)	54 (6/0)	36 (8/0)	32 (5/1)
合計	188 (24/2)	170 (17/1)	192 (26/1)	185 (20/0)	165 (20/2)	169 (24/1)
留年者の割合	0.138	0.105	0.141	0.108	0.133	0.148

（出典：文学部教務学生グループ資料）

標準修得単位未修得学生数は、平成 20 年度以前にはしばしば 80 人を上回っていたことからすると、長期的には減少傾向にある。今期の分析で新たに休学・留学経験者数を除いた、実質的な要指導学生数を計上したところ、平成 22 年度以後は増加傾向にあり、平成 25 年度をピークに再び減少に転じていること、期間を通して、学生総数の 1 割未満にとどまっていることが分かる（数値には、未修得単位数がごくわずかであって、まったく問題のない者も含まれている）。卒業生の約 10～15%が留年者であるが、長期の留年者は少ない（資料Ⅱ－Ⅱ－1－2）。

副専攻修了者の数は、資料Ⅱ－Ⅱ－1－3 のようである。文学部の全学生のうち、約 17%の学生が副専攻コースを修了していることになる。

資料Ⅱ－Ⅱ－1－3：文学部副専攻コース修了者数

平成 28 年 3 月 31 日現在

	英語	ドイツ語	フランス語	中国語	合計 A	卒業生数 B	A/B (%)
平成 22 年度	6	5	9	7	27	188	14.4
平成 23 年度	1	5	6	5	17	170	10.0
平成 24 年度	2	10	13	9	34	192	17.7
平成 25 年度	7	10	5	6	28	185	15.1
平成 26 年度	3	11	7	11	32	165	19.4
平成 27 年度	5	17	8	12	42	169	24.9
合計	24	58	48	50	180	1069	16.8

（出典：文学部教務学生グループ資料）

●資格取得状況、学外の語学等の試験の結果、学生が受けた様々な賞の状況から判断される学習成果の状況

文学部において取得できる資格と取得状況は、資料Ⅱ－Ⅱ－1－4 の通りである。全体的に減少傾向にあるが、今期の平均では、年度あたり約 102 件（1 人あたり約 0.6 件）の資格を取得していることになる。なお、教員免許の取得者の減少は、免許更新制の導入や将来の少子化等が影響していると見られる。

資料Ⅱ－Ⅱ－1－4：資格取得状況（のべ取得数）

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
教員免許（中学）	26	18	20	17	9	12
教員免許（高校）	52	38	58	30	36	31
学芸員	43	42	28	30	37	29
社会調査士	14	18	8	12	6	0
合計	135	116	114	89	88	72

（出典：文学部教務学生グループ資料）

外国語の外部検定試験の結果による単位認定の状況は、資料Ⅱ－Ⅱ－1－5 の通りであ

る。平成 25 年度に英語の単位認定件数が減少しているのは、この年度から TOEIC-IP で 650 点以上が認定の対象となったためである（以前は 500 点以上）。

資料Ⅱ－Ⅱ－1－5：外部検定試験による単位認定の状況（実人数（単位数））

年度	英語	ドイツ語	フランス語	中国語	韓国語
平成 22 年度	134 (360)		2 (10)	1 (8)	4 (20)
平成 23 年度	126 (324)	2 (12)	3 (20)	1 (8)	3 (20)
平成 24 年度	116 (282)				
平成 25 年度	19 (34)	1 (2)	4 (26)	1 (4)	5 (28)
平成 26 年度	28 (46)	2 (10)	2 (16)		1 (8)
平成 27 年度	36 (60)		2 (8)	2 (12)	

（出典：文学部教務学生グループ資料）

学生の受賞に関しては、資料Ⅱ－Ⅱ－1－6の通り短歌の創作に関する賞の受賞者が6年連続で出ている。受賞者のほとんどが共通科目「言語表現論」の受講者である。

資料Ⅱ－Ⅱ－1－6：学生の受賞状況

平成 22 年度	若山牧水青春短歌大賞 大賞 1 名、佳作 1 名
平成 23 年度	若山牧水青春短歌大賞 大賞 1 名、審査員特別賞 1 名
平成 24 年度	若山牧水青春短歌大賞 大賞 1 名、佳作 3 名
平成 25 年度	若山牧水青春短歌大賞 佳作 4 名
平成 26 年度	若山牧水青春短歌大賞 大賞 1 名、審査員特別賞 1 名、佳作 1 名
平成 27 年度	若山牧水青春短歌大賞 優秀賞 1 名、佳作 3 名 前田純孝賞（学生短歌コンクール）新温泉町長賞 1 名

（出典：文学部教務学生グループ資料）

●学業の成果の達成度や満足度に関する学生アンケート等の調査結果とその分析結果

授業評価アンケートの評点の平均値が 3 未満の項目のある授業数と 3 未満の項目の総数の推移はⅡ－Ⅱ－1－7の通りであり、問題のある授業数は減少し、平成 27 年度ではゼロになっている（回答講義数は 200 前後）。総合評価が 3 未満の授業数は 0 か 1 である。FD 委員会では問題のある授業の担当者から事情を聞き、必要があれば改善を求めている。

資料Ⅱ－Ⅱ－1－7：授業評価アンケートで評点平均値が 3 未満の項目を含む授業数と 3 未満の項目の総数（かつこ内は「Q8（平成 26 年度からは Q3）授業の総合評価」の項目についての数）

	前期		後期	
	授業	項目	授業	項目
平成 22 年度	4	7 (1)	5	5 (0)
平成 23 年度	5	5 (1)	4	6 (0)
平成 24 年度	3	3 (0)	1	1 (0)
平成 25 年度	3	5 (0)	2	3 (1)
平成 26 年度	1	1 (1)	1	1 (1)
平成 27 年度	0	0	未集計	未集計

（出典：文学部 FD 委員会資料）

1 年次前期の「人文学の基礎」では独自のアンケートを実施している。質問項目は、「どのような面で有意義だったか」「今後の勉学に役立つと思った内容は何か」「改善してもらいたいものは何か」「宿題の量はどうか」「新たに取り入れてもらいたい内容は何か」などである。資料Ⅱ－Ⅱ－1－8は、結果の一部である。

資料Ⅱ－Ⅱ－1－8：平成26年度「人文学の基礎」のアンケート結果（抜粋）

回答数 183 「どのような面で有意義だったか」について多かった回答 ・ 大学で学ぶ心構えを知るのに役立った…129 ・ 大学で学ぶ技術の修得に役立った…123 「今後の勉学に役立つと思った内容は何か」について多かった回答 ・ 文章の作成…149 ・ 口頭発表の方法…128 ・ 文献の読解…117
--

（出典：文学部 FD 委員会資料）

同時期に開講される「人文学への招待」でも、独自アンケートを実施しており、ほぼ半数の学生がこの授業が専修コースの選択に「大変参考になった」と回答しており、「少し参考になった」と合わせると 93%に及ぶ。

教育開発センターが過去 3 年間にわたって卒業予定者を対象に行った全学アンケートの結果（資料Ⅱ－Ⅱ－1－9）を分析すると、教育目標ごとの達成度に関しては、「専門的な知識・技能・態度」「物事を論理的に考える力」「自ら課題を見つけてそれに取り組む力」「困難に直面してもそれに対処していく力」「他人と協調して物事に取り組む力」で高い達成度を示している。また、平成 24・25 年度と平成 26 年度を比較すると、「専門的な知識・技能・態度」「困難に直面してもそれに対処していく力」で大きな伸びが見られるほか、全体的にも全学平均を上回る項目も増え、教育全般についての満足度は、5.48、5.50 から 5.80 へと著しい向上が見られる。

資料Ⅱ－Ⅱ－1－9：卒業予定者アンケート

		幅広い分野にわたる教養	専門的な知識・技能・態度	物事を論理的に考える力	的確な判断力	自ら課題を見つけてそれに取り組む力	困難に直面してもそれに対処していく力	国際的な視野	外国語コミュニケーション能力	リーダーシップ	他人と協調して物事に取り組む力	教育についての全体的な満足度
H24	文学部	3.62	3.75	3.77	3.53	3.74	3.84	3.14	2.75	2.97	4.01	5.48
	全学	3.66	3.92	3.81	3.57	3.64	3.79	2.94	2.57	3.09	3.96	5.49
H25	文学部	3.61	3.60	3.67	3.36	3.60	3.77	2.99	2.84	2.83	3.90	5.50
	全学	3.68	3.92	3.80	3.59	3.68	3.81	2.96	2.68	3.12	3.98	5.51
H26	文学部	3.75	3.96	3.91	3.65	3.92	4.06	3.26	2.86	3.10	3.97	5.80
	全学	3.72	3.99	3.87	3.67	3.71	3.83	3.08	2.77	3.13	3.97	5.56

（出典：岡山大学教育開発センター資料）

（水準）期待される水準を上回る
（判断理由）

標準単位未修得学生の数は、第1期より減少し、指導が必要な学生は1割未満にとどまっている。卒業者に占める留年者の割合は1割強であるが、これには留学による主体的な留年が含まれていることを考えると、問題のある留年者の数は低く抑えられているといえる。資格取得については、6年間の平均で、1人あたり約0.6件の資格を取得している。副専攻コースの修了者も全学生の17%に及ぶ。資格取得や副専攻修了は決して簡単ではないが、専門教育の学習と並行して、それらを実現している学生が一定数いることは、文学部の教育成果として特筆される。また、授業評価アンケートの結果では、問題のある授業が減少、ついにはなくなっており、卒業予定者アンケートの結果では、平成25年度から26年度にかけて、教育目標の達成度や教育の満足度が著しい向上を示している。創作に関する学生の受賞も6年間連続しており、実践型授業の教育効果が表れている。

観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

●進路・就職の状況から判断される学業の成果

今期の卒業生の就職率は、平均すると、90%を上回っている(資料Ⅱ-Ⅱ-2-1)。特に、平成26、27年度は、90%を大きく超え、全国の文学部系の中でも上位に位置する(平成27年発表のランキングでは4位)。ただし、大学院に進学する者は、1割前後に止まっている。

産業別に見ると、教育・学習支援業が多いのは当然として、公務員や製造業、金融業・保険業も多く、多方面に進出している(資料Ⅱ-Ⅱ-2-2)。地域別に見ると、中国・四国地区が7割を超えるが、関東や関西地区も少ないわけではない(資料Ⅱ-Ⅱ-2-3)。出身地と就職地域の関係については、岡山県内に就職する他県出身者数は、岡山県外に就職する岡山県出身者数を上回り、岡山地域への人材供給に貢献している(資料Ⅱ-Ⅱ-2-4)。

文学部では、就職ガイダンスを年2回開催するとともに、学部内にも支援室を設けたり、教員研修を開催したりして、支援体制を強化している。

資料Ⅱ-Ⅱ-2-1：進路状況

	卒業者数	進学者数	就職者数	就職希望者数	就職率
平成22年度卒業	188	24	138	159	86.8%
平成23年度卒業	170	22	126	143	88.1%
平成24年度卒業	192	17	148	158	93.7%
平成25年度卒業	185	15	147	164	89.6%
平成26年度卒業	165	15	134	144	93.1%
平成27年度卒業	169	13	142	150	94.7%

(出典：文学部教務学生グループ資料)

資料Ⅱ-Ⅱ-2-2：産業別就職者数

	農業・林業	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	情報通信業	運輸業	卸売業・小売業	金融業・保険業	不動産業・物品賃貸業	学術研究専門・技術サービス業	宿泊業・飲食サービス業	生活関連サービス業・娯楽業	教育・学習支援業	医療・福祉	サービス業	国家公務	地方公務	その他
H22年度卒業		2	20		5	7	15	26	1		1	1	18	4	13	6	19	
H23年度卒業	1	1	18		11	3	12	18	2		1		14	7	16	5	17	
H24年度卒業		2	16	2	16	6	15	26	1		3		23	3	14	4	17	
H25年度卒業	1	3	20		12	5	14	18		1	2	3	20	6	8	6	28	
H26年度卒業		2	18		9	3	14	19	1	1	2	5	26	5	2	7	19	1
H27年度卒業		1	14		11	7	10	18	2	3		7	16	4	7	6	36	

(出典：文学部教務学生グループ資料)

資料Ⅱ－Ⅱ－2－3：地域別就職者数（かつこ内は％）

	北海道・東北	関東・東海・北陸	近畿	中国(岡山以外)	岡山県	四国	九州	その他	計
H22 年度卒		18 (13.0)	26 (18.8)	21 (15.2)	52 (37.7)	20 (14.5)		1 (0.7)	138
H23 年度卒	1 (0.8)	20 (15.9)	17 (13.5)	16 (12.7)	46 (36.5)	23 (18.3)	3 (2.4)		126
H24 年度卒		1 (0.7)	18 (12.2)	32 (21.6)	58 (39.2)	25 (16.9)	13 (8.8)	1 (0.7)	148
H25 年度卒		20 (13.6)	19 (12.9)	16 (10.9)	67 (45.6)	19 (12.9)	5 (3.4)	1 (0.7)	147
H26 年度卒		16 (11.9)	17 (12.7)	27 (20.1)	56 (41.8)	13 (9.7)	5 (3.7)		134
H27 年度卒	1 (0.7)	22 (15.5)	13 (9.2)	18 (12.7)	68 (47.9)	18 (12.7)	2 (1.4)		142
計	2 (0.2)	97 (11.6)	110 (13.2)	130 (15.6)	347 (41.6)	118 (14.1)	28 (3.4)	3 (0.4)	835

(出典：文学部教務学生グループ資料)

資料Ⅱ－Ⅱ－2－4：出身地と就職地域の関係

	岡山出身・岡山就職	岡山出身・県外就職	県外出身・岡山就職	県外出身・県外就職
H23 年度卒業	28	14	18	67
H24 年度卒業	43	14	16	78
H25 年度卒業	42	9	25	71
H26 年度卒業	35	7	21	71
H27 年度卒業	44	10	24	64

(出典：文学部教務学生グループ資料)

●文学部で学んだ専門的知識をいかした就職の状況

文学部の専門教育と深く関わる職業としては、教員と学芸員がある。在学中に教育職員免許状を取得して実際に教職に就いた者の数は、資料Ⅱ－Ⅱ－2－5の通りである。一定数の学生が着実に教職に就いている。

資料Ⅱ－Ⅱ－2－5：教職に就いた学生の数

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	計
社会 (中学)	1	1	1	0	0	0	3
地理歴史 (高校)	0	0	0	1	2	1	4
公民 (高校)	0	0	0	0	0	0	0
国語 (中学)	0	0	2	2	0	2	6
国語 (高校)	5	3	7	3	6	4	28
英語 (中学)	0	0	0	1	3	1	5
英語 (高校)	2	1	2	1	1	3	10
計	8	5	12	8	12	11	56

(出典：文学部教務学生グループ資料)

文学部では、省令による学芸員の新课程施行を機に専任教員を採用し、ミュージアム教育実習室を設けるなどして、学生の資格取得を支援している。また、地域博物館との連携

を強めるべく、様々な事業を展開している。今期の学芸員資格の取得者数は資料Ⅱ－Ⅱ－4の通りであり、今期に学芸員・文化財専門職員として関係機関に就職した学生（大学院修了者を含む）の数と就職先は資料Ⅱ－Ⅱ－2－6の通りである。就職者数は年平均3人であり、専門的知識・技能をもつ人材の供給機関としての役割を果たしている。

資料Ⅱ－Ⅱ－2－6：学芸員・文化財専門職員として就職した者の数（平成22～27年度）

鳥取県教育委員会	1人
出雲市教育委員会(出雲弥生の森博物館)	2人
兵庫県教育委員会	1人
神戸市教育委員会	2人
姫路市教育委員会	1人
豊岡市教育委員会	1人
福崎町教育委員会	1人
岡山県古代吉備文化財センター	1人
津山市教育委員会	1人
笠岡市立竹喬美術館	1人
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	1人
金沢21世紀美術館（猪熊弦一郎現代美術館より移籍）	1人
岡山県立美術館	1人
多摩美術大学	1人
国際交流基金	1人
笠岡市教育委員会	1人

（出典：学芸員課程担当教員調べ）

●学業の成果に関する卒業生及び進路先・就職先等の関係者の意見

「岡山大学における「学士力構築」の検討に資するための調査」（平成22年に報告書刊行）における文学部卒業生への個別インタビューでは、満足度を90点とした卒業生は留学制度や就職支援の充実をその理由に挙げている。また、他の卒業生は、「文学部での学びで役に立っていることとして、基本的に自分の頭で考え、基本的に何でもまず自分の言葉で話すという意識が身についた」と話している。

平成26年5月に実施した「岡山大学人文社会科学系卒業生アンケート」の結果（資料Ⅱ－Ⅱ－2－7）では、文学部を志望する学生が学ぶことを主たる目的として本学を選択していること、卒業生が教育内容に大きな満足を得ていることを示している。

資料Ⅱ－Ⅱ－2－7 岡山大学人文社会科学系卒業生アンケートの結果（抜粋）

回答数：412
・どのような理由で卒業された学部を選びましたか？
「自分の学びたい分野・科目があったから」…90%以上
「進路・就職に有利だから」…0%
「センター試験の得点あるいは偏差値がちょうど適していたから」…7.8%
・卒業された学部で学んだ教育内容については満足のいくものでしたか？
「満足」…70%（他の文系学部を大きく上回る）

（出典：3学部アンケート調査委員会資料）

平成27年2月に実施した「文学部卒業生アンケート調査」の結果（資料Ⅱ－Ⅱ－2－8）では、文学部の学生にとって卒業論文が重要な位置を占めていることが改めて確認された。

資料Ⅱ－Ⅱ－2－8 の結果（抜粋）

回答数：109

・社会人としての立場から、文学部で受けた教育によって一定の向上が見られた能力や身についた知識は何ですか？

「専門分野の知識」…79人

「思考力・論理性」…73人

「課題発見力・探究心」…48人

「異文化に関する知識・理解」…53人

・文学部の教育において卒業論文は重要であるとお考えになりますか？

「重要である」…90.7%

（出典：3学部存続に向けた検討WG資料）

平成26年6月に実施した「岡山大学文学部・法学部・経済学部卒業生の就職先へのアンケート調査」（過去5年間で3学部卒業生が2人以上就職した会社・機関302が対象；回収数66）では、文学部出身者に対して、「文章力・表現力に優れている」「思考・発想が柔軟である」「考え方に芯があり、論理的な思考ができる」といった評価コメントが見られた。

（水準）期待される水準を上回る

（判断理由）

高い就職率を維持していること、教育関係の機関だけでなく、公務員や製造・金融業などを含め、多方面に進出していること、岡山県への人材供給に一定の役割を果たしていること、卒業生や企業の評価もきわめて高いことから、文学部で修めた学業の成果は、社会的にも非常に高い価値をもつものであることが分かる。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

「導入教育の定着とさらなる改善」について、第1期末の水準は、学生や教員からのフィードバックを行いながら、そこにある提言を反映させるべく改善を行うことにより、学生の不満も減り、教員による指導内容のばらつきも改善しつつあるといったものであったが、第2期末でも、独自のアンケートの実施、新入生との懇談会の開催などによって学生の意見を直接聞き、年度末の研修会において教育内容や教育方法を熱心に議論している。すでに第1期において有効な取り組みがなされていたといえるが、第2期は、その基本理念を受け継ぎつつ、教材データの共有や評価基準の検討など、細部の改良に努めており、質を大きく向上させている。

「卒業論文を頂点とする積み上げ式の実践型少人数教育」について、第1期末の水準は、「基礎科目1」「基礎科目2」「演習」「課題演習」といった演習型の授業を積み重ね、卒業論文として集大成するというように、きめ細かな指導を段階的に行うために、少人数教育を実施しているというものであったが、第2期でも、この方針を受け継ぎ、少人数教育を実践している。1年次の演習型授業については、第2期では「人文学の基礎」「人文学入門演習」に再編成し、前者はクラスあたり12~13人、後者はクラスあたり平均19人(上限30人)の受講者で運営している。「演習」についても、ほとんどの授業が受講者20人以下で運営されている。卒業論文の研究指導を行う「課題演習」の教員1人あたりの平均指導学生数は約4人である。積み上げ式の少人数教育の効果は、卒業生アンケートの結果にも明確に表れており、質を維持していると判断される。

「外国語教育と連携した学生の海外派遣の推進および留学生の積極的な受け入れ」について、第1期末の水準は、文学部に副専攻制度を導入し、文学部の学生が外国語の運用能力を磨き、海外留学する機会を増やすことに貢献したというものであったが、第2期では、副専攻コースを修了した学生が全体の17%に及び、ドイツ・フランスの大学との交流協定の締結により、副専攻コースでの教育は、留学を前提とした、より高度なものとなっている。優秀な国際協力教員の採用や留学生の受け入れを倍増させるなどの取り組みによって、文学部の教育全体の国際通用性は確実に高まり、海外の協定大学が増えたこともあって、第2期には、留学や語学研修に参加する学生は、年平均8人程度から40人以上へと著しく増えたことから、第2期末の水準は、大きく改善、向上しているといえる。

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

「多面的な学生支援体制」について、第1期末の水準は、指導教員制を導入し、定期的な問題を抱えている可能性のある学生を指導する体制をつくったが、要指導学生はしばしば80人を超え、長期留年者も毎年2~4人ほどいるというものであった。第2期では、指導教員制に加え、新たに、学生相談ルームの開設、学生支援ガイドの作成、教員研修会の開催などに取り組み、学生支援の質は、大きく改善、向上した。

「文学部の教育に対する在学生・卒業生の評価」について、第1期末の水準は、授業評価アンケートにおいて総合評価が3未満の授業が複数見られ、卒業予定者アンケートでは3つの教育目標および教育に対する全般的な満足度で全学平均をやや上回るというものであったが、第2期では、授業評価アンケートの総合評価が3未満の授業数は次第に減少し、平成27年度には皆無になっており、卒業予定者アンケートでも、教育目標の達成度・満足度は第1期から更に向上し、全学平均を上回るものが増加している。卒業生を対象としたアンケートでも、文学部出身者は、純粋に学びたいことを学ぶために文学部に入学し、卒業論文の重要性を卒業後も実感し、教育に対する高い満足が社会人になってからも続いていることが分かった。以上のことから、大きく改善、向上しているといえる。

「就職の状況と教育内容に対する社会的需要」について、第1期末の水準は、就職率は83.8%~90.9%で、公務員関係は少なく、民間企業が大部分を占め、卸売・小売業、飲食店、宿泊業、金融・保険業、そして製造業へ進むものが多く、岡山県に就職する者が最も多いというものであったが、第2期末の水準は、就職率は86.8%~94.7%と大幅に向上し(平

成 27 年の調査では国立大文学部系で 4 位)、多方面に輩出している状況は変わらないが、教育・学習支援業や地方公務員が目立って増え、県外（特に中国地区）への就職も増えている。学芸員・文化財専門職員を育成する教育機関としての実績は第 1 期から確立していたが、今期は新課程に対応し、教育内容のいっそうの充実を図り、17 人の学芸員・専門職員を誕生させている。以上のことから、大きく改善、向上しているといえる。